大豆近況 VOL.157

関係部署にご回覧ください。				

団体会員
一般会員
賛助会員
協賛企業
各位

令和3年12月 6日
一般財団法人 全国豆腐連合会
会 長 東田 和久
相談役 郷 和平

「大豆近況」をお届け致します。是非、ご活用下さい。

○北米産大豆

米国農務省より11月9日に発表された2021/2022年度の世界の大豆生産高予測は、米国産・アルゼンチン産の減少により、前月比0.3%減の3億8,401万トンとなりました。また、生産高が減少し需要量が増加したことで、期末在庫は前月比0.8%減の1億378万トンに下方修正されました。

米国産につきましては、単収が減少見込となり2021年産生産量は前月比0.5%減少の1億2,042万トンに下方修正されました。また、生産高が減少したものの需要量の減少が上回り、期末在庫は前月比6.3%増加の925万トン(在庫率7.8%)となっています。

また、同省により11月22日に発表された11月21日現在の米国主要生産州の大豆収穫率は95%(前年98%、平年96%)と前年・平年より若干遅いものの概ね順調に推移しております。一方でカナダ産におきましては、一部地域で10月の雨続きの天候により収穫作業が滞ったものの概ね終了段階に入っております。未だ新穀のサンプルは入手できておりませんが、品質確認を急ぎたいと思います。

2021年産は概ね年明け以降入船が本格的になってきますが、依然としてコンテナ不足や船積状況の混乱に改善の兆しが見られないまま、海上運賃は高水準を維持しております。一部では20フィートコンテナの確保が困難になり、大豆の輸送ではこれまでは使われていない40フィートコンテナを使用せざるを得ない事例も出てきています。また、先日カナダ／バンクーバーの北東部地域での大雨による道路や鉄道への被害により物流網が寸断される事態が起きました。復旧作業は進んでおりますが、貨物輸送には大きな影響を受けております。

また、2022年産北米産Non-GMO大豆の播種前栽培契約が始まっております。2021年産の単収の低下や大豆の生産コストの上昇からNon-GMO大豆の作付けプレミアムが上昇している様子で、提示される価格は2021年産と比べ軒並み上昇している状況です。

11 月のシカゴ相場は期近限月で 12.50 ドル付近から始まりました。米国産地での好天候予報や需給報告で生産見通しを引き上げるとの観測から売りが進み 11.90ドル付近まで値を下げました。9 日の需給報告では市場の予想に反して生産高が引下げられたことから値を上げ、また、中国の輸出商談の公表が続いたことで買いが進み 12.80ドル付近まで上がりました。その後は利益確定の売りや原油安につられて下がり、現地 11 月 29 日現在では 12.50ドル付近まで戻しております。

為替相場は 1 ドル=114 円付近から始まりました。初旬は米連邦準備理事会(FRB)による緩和的金融政策が当面続くとの見方から日米金利差の縮小を手掛かりに円高が進み 1 ドル=113 円を割りました。その後米国の経済指標の改善や、バイデン大統領が米連邦準備理事会(FRB)のパウエル議長を再任する方針を発表したことをきっかけに米国での金融政策の正常化が進むとの観測や金利先高観が強まったことで1ドル=115.50 円付近まで円安が進みました。しかし、南アフリカで新型コロナウィルスの新たな変異種が発見されたことが景気の先行き不透明感に繋がり投資家が低リスク通貨とされる円の買いを膨らませ、26 日には一気に 1 ドル=112 円台に迫る急激な動きとなり、反落しながらも 29 日～30 日では 1 ドル=113.90 円～112.90 円の大きな幅で推移しております。

○国産大豆

令和 3 年産国産大豆につきましては、北海道産を始めとして順次収穫～撰別調整作業が進んできております。12 月 2 日に農林水産省で行われた「国産大豆に関する情報交換会」にて令和 3 年産大豆の集荷・販売計画(全農・全集連)が報告され、これによりますと 10 月末時点の全体の集荷見込み数量は約 18 万トンで、前年実績対比 108%、本年生産計画対比 92%となっております。(詳細は別添「令和 3 年産大豆の生産状況」参照)。

なお、令和 3 年産の第 1 回目入札取引が 12 月 15 日(水)に行われ、北海道・東北・北陸の産地銘柄について約 2,100トン(大半が北海道産と思われます)が上場の見込とされています。令和元年産：初回 1,400トン、令和 2 年産：初回 1,200トンの上場数量に比べれば多くなる見込です。粒形や等級など上場の内容にもよるとは思いますが、高値スタートにならないよう冷静な対応が望まれます。

以上

令和3年産大豆の生産状況

令和3年12月2日

【農林水産省政策統括官穀物課】

○ 大豆の作付面積

	令和2年産 (ha)	令和3年産 (ha)	対差 (ha)	対差 (%)
北海道	38,900	42,000	3,100	108
東 北	34,900	35,600	700	102
関 東	9,570	9,740	170	102
北 陸	11,900	11,700	▲ 200	98
東 海	11,800	12,100	300	103
近 畿	9,100	9,410	310	103
中四国	4,740	4,780	40	101
九 州	20,800	21,000	200	101
全 国	141,700	146,200	4,500	103

資料：農林水産省「作物統計」

- 最大産地である北海道では、小豆やいんげんからの転換等により、3,000haの拡大がみられた。
- 都府県では、北陸で減少したものの、東北を中心に作付面積が拡大し、全国では3%増加の146,200haとなった。

○ 集荷見込み数量（10月末時点）と生育・収穫作業ステージ

【全国農業協同組合連合会・全国主食集荷協同組合連合会】

- 3年産大豆の集荷見込み数量（10月末時点）は、約18万トン（前年実績対比108%、本年生産計画対比92%）となった。
- 北海道においては、一時期干ばつ等が生じたものの、総じて天候に恵まれことから、生産計画を上回ると見込まれる。
- 東北・関東・北陸・東海においては、概ね生産計画を確保するものと見込まれる。
- 近畿・中四国においては、8月の長雨による湿害等によりほ場間差がみられるものの、概ね生産計画を確保するものと見込まれる。
- 九州地区においては、主産県である福岡・佐賀を中心に8月の豪雨による浸水・冠水等による影響がみられ、収量は平年の3～5割程度の減少が見込まれる。

単位：トン

地域	2年産集荷実績	3年産集荷見込み数量		直近の収穫状況	特記事項
		5月末時点（生産計画）	10月末時点（集荷計画）		
北海道	66,415	69,541	**70,750**	収穫終了	夏季の干ばつにより、一時期影響を受けた地域はあるものの、総じて天候に恵まれたことから、収量は平年以上と見込まれる。
東北	37,342	42,290	**42,300**	収穫中	概ね生産計画を確保するものと見込まれる。
関東	8,443	10,705	**10,864**	収穫中	概ね生産計画を確保するものと見込まれる。
北陸	12,050	15,910	**15,330**	収穫中	概ね生産計画を確保するものと見込まれる。
東海	9,610	11,490	**10,640**	収穫中	概ね生産計画を確保するものと見込まれる。
近畿	6,486	7,950	**7,098**	収穫中	8月の豪雨による湿害等によりほ場間差がみられるが、概ね平年並みに生育しており、平年並みの収量が見込まれる。
中国四国	2,310	2,430	**2,560**	収穫中	8月の豪雨による湿害等によりほ場間差がみられるが、概ね平年並みに生育しており、平年並みの収量が見込まれる。
九州	19,443	35,365	**20,406**	収穫中	8月の豪雨により浸水・冠水した地域では収量が3～5割程度減少する見込みだが、影響のないほ場では平年並みの収量が見込まれる。
合計	166,453	195,431	**179,968**		